

●公開講演会

「想いをつなぎ、平和を考える」

—「岐阜空襲を記録する会」、
「空襲体験を語りつぐ大垣の会」の活動から—

「岐阜空襲とはどのようなものであったか」

講演者 篠崎喜樹氏*1

「空襲体験を語りつぐということ」

講演者 高木正一氏*2

〈ごあいさつ〉 森 誠一*3

〈司会〉 大前智文*4

日時：2017年11月25日(土) 14:00～16:00

場所：岐阜経済大学 4号館1階 4101教室

大前智文

定刻となりました。これより岐阜経済大学地域経済研究所主催の公開講演会、「想いをつなぎ、平和を考える」を始めさせていただきます。では、最初に地域経済研究所長の森誠一先生よりご挨拶をいただきます。

森 誠一

岐阜経済大学地域経済研究所長の森誠一です。本日は公開講演会にお集まりいただきありがとうございます。

地域経済研究所では地域をフィールドとして、様々な観点から研究活動に取り組んでおります。昨年度は、人々の生命・財産を守る基本である「地域と防災」というテーマを設定し、活動してまいりました。この地域は水資源が豊富な「水都」と呼ばれておりますが、洪水に悩まされてきたという歴史を有しております。そのために、

堤防を築き、河川を改修し、まさに本学が立地するこの土地も荒地から先人たちの努力により拓かれてまいりました。この西濃地域において「防災」という課題は、当該地域における経済活動の進展に根源的に関連しているものです。

昨年度のテーマ「地域と防災」では、自然現象としての「災い」を対象としておりました。本日のテーマである平和、その反対にある戦争は、人為的であり、人間が起こすものです。そのため、地震、台風、洪水などに比べ、それを防ぐ手立てを講じることは容易であるとも考えられます。自然現象では、なかなかそういうわけにはまいりませんが、我々が真摯な努力をすれば、戦争はなくなるはずのものであります。

本日の公開講演会において議論いただければと思いますのは、この岐阜・大垣で空襲に遭われたり、戦時下を過ごされたりなどした体験・経験の中から、どのように戦火を免れ、そのよ

*1 「岐阜空襲を記録する会」代表
*2 「空襲体験を語りつぐ大垣の会」事務局長
*3 岐阜経済大学地域経済研究所長・経済学部教授
*4 岐阜経済大学経営学部専任講師

うな「災い」からご自身やご家族を守ってこられたか、あるいは不幸な出来事に見舞われたか、いろいろなお話・ご意見をお聞きし、これからどのように戦争という「災い」を防ぐことができるかということについて議論をしていければと思っております。

こうした「災い」、換言すれば「天災」というものは忘れた頃にやってくるというようなことを申しますが、この戦争についても同様のことが言えるかもしれません。これを防ぐということは、古里の風景を守ることにもなります。あるいは、我々の生活を守ることにもつながるかと思えます。広く「地域づくり」として本会が成立しましたら幸いです。

本日のご講演が「地域づくり」の視点を次の世代につなぐ、いわば伝承の機会になればと思っております。こうした伝承こそが戦争という災いを防いだり、逃れたり、あるいは守ったりするということのひとつの契機になるのではないのでしょうか。それでは、本日はよろしくお願ひ申し上げます。

大前智文

ありがとうございました。それでは、簡単ではございますけれども、本日ご登壇いただくご両名のご紹介をさせていただきたいと思えます。まず、篠崎喜樹様。「岐阜空襲を記録する会」の代表をされていらっしゃいます。よろしくお願ひします。もうお一方、高木正一様。「空襲体験を語りつぐ大垣の会」の事務局長をされていらっしゃいます。本日はよろしくお願ひします。

ご両名とも、長年、地道に実直に活動を続けてこられた本テーマのキーパーソンでいらっしゃいます。本日のご講演はご活動のあらまし、それに加えて、なぜこのような活動をされていらっしゃるのか、その思いまでをお伺いできればと思っております。

それでは、早速ではございますけれども、篠崎様より「岐阜空襲とはどのようなものであったか」というテーマにて、ご講演いただきたく存じます。ご登壇をよろしくお願ひいたします。

篠崎喜樹

この度は岐阜経済大学の公開講演会にお呼びいただきまして、誠にありがとうございます。本日は、岐阜空襲というのは一体どういうものであったのか、加えて、「岐阜空襲を記録する会」という組織はどのような活動を行ってきて、そして、現在はどのような活動を行っているのかについてお話ししたいと思います。

本日は2名で参りました。こちらは中島裕子さんです。お若くいらっしゃるため、空襲体験はありませんが、岐阜市平和資料室の展示の作成や、このような講演の構成等を考えてくださる学芸員の方です。お手伝いということで来ていただきました。どうぞよろしくお願ひします。

はじめに資料を説明させていただきます。A3のものが2枚あります。この表の付いたものの左側が1ページ目です。左側にアメリカ軍が空襲した後、作戦本部に提出した報告書がありますが、それを翻訳して要点をまとめたものです。岐阜空襲の全体像はこれで把握できるのではないかと思います。

それから、右の上のほうは空襲被害で5つほど数字が残っておりますね。全て違うので、どれが正しいか、決定的なものはございませんが、このような数字が出てきております。本日は岐阜経済大学での講演ですから、経済的な損失という視点からまとめることができると思いますが、ちょっとそれが欠落しておるので申し訳ないです。

それから右下のほうは投下された焼夷弾1トン当たりの被害です。アメリカの報告書では5つの都市（岐阜、一宮、桑名、大垣、岡崎）が名古屋の衛星都市として位置付けられており、いつもセットで並べられておりますが、その中で岐阜は1トン当たりの被害が桁違いに多かったことを明示している資料です。

それから裏の方、梅林国民学校高等科2年生（現在の中学2年生）だった本田幸恵さんというお嬢さんが書かれた日記です。7月9日が岐阜空襲の日、そして、その翌日の10日です。実に粗末な雑記帳にいつもの日は2行か3行ぐらい、今日は学校で先生がこういうことをおっしゃっ

た、こういうことをやったぐらいしか書かれておりませんが、この2日間は爆発的に長く書かれています。しかも、心の中を率直に表現している優れた文章だと思い、これを現代の子どもたちにも読んでもらっています。当時の少女が自分の家を焼かれて、火に追われて、どんな精神状態になったのかということがよく分かる資料だと思います。

それからもう1枚の方は「岐阜空襲を記録する会」の活動の要約です。これを簡単に説明させていただきます。「岐阜空襲を記録する会」ができたのは1974年、今から43年ほど前になります。この1974年というのは、佐藤栄作内閣から田中角栄内閣にあたる時代です。日中国交回復、沖縄返還、高度経済成長などで位置付けられるように、つまり、戦後のあの大変な生活の時代から、ようやく復興が定着してきて、やっと人々の心が楽になった時代です。そして、過去をもう一度振り返ってみようかなという、そんな時代だったのではないかと思います。そのような時に、東京で空襲を記録する会というのが生まれ、それから横浜、名古屋、大坂、神戸などでも活動が始まりました。そこで岐阜市も空襲を受けたのだから、誰かがこのような活動をやらなければと思い、やり始めたということになります。

そのように会を始めましたら、大変な期待が寄せられました。特に、収集してきた資料を展示する「被災40周年空襲展」として、岐阜で唯一のデパートだった丸物百貨店、後の近鉄百貨店、そこで6日間開催することにしました。中日新聞、デパート、記録する会の共催でした。6日間で4万人が集まって見ていただきました。中日新聞紙面には連日のように記事を載せていただきました。最終日などは8階催事場までの階段がずっと下から埋まってしまいました。もう少し延期してほしいというような申し入れもあるなど、驚くほどの反響でした。

それから岐阜市の平和都市宣言です。これには経過がありまして、その下に非核都市宣言署名運動とあります。これは私が事務局長を務めて、岐阜市を非核宣言都市にしようと活動を始

めました。そして、約2万7千人からの署名を集め、大変盛り上がりました。しかし、市議会では22対25で否決されてしまいました。自民党だけが反対して、「非核は国政の問題だ。それを市で行う必要はない」ということで頓挫したのですが、面白いことにその3年後の市政百年というときに、突然市議会で岐阜市平和都市宣言をやりたいという提案が行われ、「反対なし」で可決されました。非核都市ではないけれども、平和都市ならば良いということになったのでしょうか。岐阜市は平和都市になった、では平和都市は何をやるのかということが課題となり、予算も付き、そして、平和都市になったのだから、あの戦災の災禍を残すという平和資料館を作りたいというような声が出て、これが議会の中でも取り上げられて、具体化してくるわけです。

右の方にいきまして、岐阜市がそのような要望を受け入れて、岐阜市平和資料館ではないけれども、平和資料室をつくらうということ提案し、市議会でも決められて、この経過には色々ありましたけれども、平和資料室がオープンしました。これが2002年です。岐阜駅の改札を降りて、そのまま建物の中を進んだ先にある、学校の教室より一回り大きいぐらいの部屋ですけれども、岐阜市に作っていただきました。そして、運営に必要な経費は市が負担し、展示物は子どもが作るという、全国でもちょっと珍しい方式のものが、しかも比較的早期に完成しました。大きな特徴として、この平和資料室は午前9時から午後9時まで開いております。休みは月に1回だけです。毎月最終火曜日が休館日です。ここは「岐阜市生涯学習センター」として貸し会議室や図書館などの様々な公共施設が集まっている建物として、その一画を平和資料室として利用しております。ここは無人で、いつもオープンになっていて、誰でもいつでもそこへ行って平和について考えることができます。大変立地のいい所にございますので、岐阜へおいでになったら皆様ものぞいてみてください。

このような活動を基礎として、その他にも様々な活動に取り組んでまいりました。平和資料室

に展示するパネルの作成。最近では、メディアコスモスという岐阜市の図書館などの複合公共施設で、1日で約3千人の来場者があるところでも展示し、終わり次第、平和資料室のほうへ移すということをしています。

また、本日もこの一環なのですが、平和講座ということで、小中高の学校や様々な団体を訪問し、空襲の問題を話しております。継続的に資料収集も行っております。そして、出版ですね。最近では映像や情報配信も必要になってきましたので、DVDの作成、ホームページの作成などもしております。よろしかったらご覧になっていただきたいと思います。そんなような活動をやっておりまして、今日はこうして集めた様々な資料を見ていただこうと思います。

まずは岐阜空襲をどのように歴史的に位置付けたいのかということをお話させていただきたいと思います。ホワイトボードに年表を書いていただきました。私は幕末以降をこのような時代に分けて考えると説明もしやすく、分かりやすいのではないかと考えております。

鎖国が江戸時代にずっと続きました。そこにペリーがやってきて開国を要求します。江戸幕府はそれを渋々受け入れて、1854年に日米和親条約を結びました。その次は1894年の日清戦争です。この間の約40年間というのはどのような時代かということ、政治・経済が変わる、教育も軍事制度も変わる、もう一切が変わった。つまり、いわゆる近代化です。そして、あの清国と戦って勝ってしまう。中国に勝てるぐらいの力をこの約40年間で付けてしまった。

そして、その後の約50年間、まさに戦争の連続だったわけです。台湾、朝鮮を植民地化した。第一次世界大戦にも勝利し、日本の国力は大いに伸びて、世界の一等国になった。そして、1937年の日中戦争へ突入し、泥沼化し、太平洋戦争へ。その結果が岐阜空襲、原爆投下、そして敗戦。ですから、この岐阜空襲というのはこの約50年間続けてきた戦争の時代の結末であったのだと捉えておきたいと思います。

次は、こちらを見ながらお聞きください。岐阜空襲では、突然岐阜市上空にアメリカの爆撃

機B-29が現れました。そして、雨のような焼夷弾を投下し始めました。岐阜市民もいつかはと覚悟は決めていたのですけれども、とても消せるような火でない。その業火の中を必死になって逃げる他にすべはありませんでした。

では、この空襲はどのように行われていたのか。ここに写真があります。これはアメリカが提供してくれた写真ですけれども、岐阜市を空襲した第一撃の写真です。ここに(1)という数字が書いてあります。この地点が第一撃です。空襲警報になると、街中の明かりを消してしまいます。ですから、岐阜が闇の中に隠れてしまう。そこへアメリカのB-29がやってきて照明弾を落とします。そうすると、もう一軒一軒の家並み分かるような、そういう明るさで眼下に市街地が現れます。そこへ向かって焼夷弾攻撃を始めたということです。そして、上のほうに1945年の7月9日の23時45分と書いてあります。真夜中です。ここがJRの岐阜駅です。それから、梅林国民学校、ここが柳ヶ瀬です。ですから、岐阜市の最初の攻撃は岐阜駅付近で、この場所を狙って焼夷弾を投下していることが分かります。今の岐阜駅の写真を見ると、この下の方から上の方へ向けて攻撃をし始めたのです。

写真がもう1枚あります。ここには(3)と書かれています。第一撃は先程の写真で見ました。第三撃で、市街地は煙でよく見えなくなっています。第一撃が写真の右下の岐阜駅です。第三撃の向こうは柳ヶ瀬です。このように見ると、岐阜の市街地から外れています。燃え上がっている市街地の西のほうに照明弾を当てると、この写真の状態になります。よく見ると、黒い点々がいっぱいあります。100個ぐらいあります。これが今落ちていく焼夷弾です。これからこの下が火の海になるわけです。ここが長良川、ここが鏡島の弘法さん、岐阜高等女学校、岐阜市の市民病院、この斜めの道が中山道です。第一撃から5分後の写真です。これがアメリカ軍の攻撃の仕方です。

では、このような空襲はどのような作戦計画に基づき行われたのでしょうか。南の島のマリアナ諸島。ここをアメリカ軍が占領して飛行場

を造りました。ここはそれまで日本が支配をしていました。アメリカはどうしてもマリアナ諸島が欲しいのです。ここを奪取し、飛行場を建設すれば、戦略爆撃機B-29は未着陸で日本まで往復できるからです。日本側もそれを理解していますから、ここを取られたらもう大変だと、絶対防衛圏を設定して、絶対守るのだということで部隊を送り込みました。壮絶な戦闘が行われました。岐阜からも約4千人の部隊が招集され、送り込まれました。1ヶ月半で全滅です。生き残った者が8名、捕虜として4名、山中に逃げ込んだ4名が助かっただけでした。本当に壮絶な戦いで、1944年7月には「玉砕」、全滅でした。1944年8月にはグアムやテニアンも「玉砕」しました。そこで、アメリカ軍は飛行場を建設し、B-29を配備しました。

硫黄島でも「玉砕」。ただちにアメリカ軍は爆撃戦闘機P-51を配備しました。これでマリアナ諸島から爆撃機、護衛しながら爆弾を投下できる戦闘機は硫黄島から、この体制のもと空襲が行われました。この写真がB-29です。「空の要塞」と呼ばれました。羽を広げた長さが43メートル。胴体の長さが30メートル。プロペラが4つ。4つものプロペラを持っている飛行機は他にはありません。当時では世界最大の爆撃機です。これが約7時間かけて飛んできます。これは名古屋から撮った、上空をいくB-29です。7時間かけてやってきて、また7時間かけて帰っていく。攻めるほうも大変だったと思います。今のようにボタンひとつでミサイル、弾道弾を発射するのとは違います。伊勢湾を北上し、琵琶湖を目標に来たのだそうです。そこで方向を変えて、岐阜、一宮、名古屋に攻撃をしたようです。

岐阜市に落とされた焼夷弾は2種類です。ひとつはこれです。岐阜市の平和資料室にも現物がございます。これは中が空っぽになっておりますが、六角形の筒です。そして、中には女性のストッキングのような袋にガソリンをゼリー状に固めたものが入っています。そして、一番底のほうに安全装置があります。空中で分離した時、安全装置が外れます。こういうふうにはば

けるわけですね。一発ずつになって落ちてきます。そして、地面に当たったショックで下のほうにある小さな火薬が爆発して、火の付いた油の固まりが飛び出ます。それが38本の束になっています。この38本もの束が、途中で1本ずつ分離して、それぞれが火を吹き出すわけです。どのような消防車でも消せないような火災を瞬時に起こすというのがアメリカ側の作戦でした。これを約2千4百発、この岐阜の上空から落としていきました。

もう一つがこれです。これは焼夷爆弾といわれ、飛散して爆発します。火が四方八方へ飛ぶのです。ですから、最初にこれを落とすのだそうです。そして、まだ残っているところに先程の集束弾を落とす。これを約1万2千発投下したと記録されています。

これは米軍のその命令書の中にあった文書です、爆撃中心点を指定しています。この交差点ですね。半径1.2キロメートルほどの円が描かれてあり、この場所を狙って焼夷弾を落とさない、そうすれば落とされた焼夷弾の半分はこの円の中に落ちるといふものです。ここはどこか。岐阜駅がこの場所、それからずっと北のほうへ、交差した中心が岐阜市文化センター、金神社のある交差点です。ここが中心です。ここは一体どういう場所、地域か。ここには軍隊はいません。軍需工場はありません。市民が平和に暮らし、商売をしている場所です。そこを狙って集中的に攻撃をする。これがアメリカの中小都市攻撃の作戦です。原爆も同じです。上空で爆発させて瞬時に破壊する。

では、日本側はどういう防御をしたのでしょうか。落ちてきたらスコップですくって外へ放り出せ、燃えたら布団や畳をかけて消せ、水をかけろというようなことでした。先程のような焼夷弾が一斉に落ちてくるのですから、そんなことはできるわけがない。しかし当時は、これは消せるのだ、逃げた者には罰金や懲役刑を課すという「防空法」が存在していました。「逃げて消す」ということが基本的な原則だったので。そのために、このような防空訓練をご婦人方が集められ、行っていました。内容はバケ

ツで水を汲んで火を消す。ですが、これはさきほどの瞬間的に生じる火災には役立ちません。

あるいはこの写真のような防御方法です。これは道路を拡張しています。縦の線が長良橋通り、横の線が若宮町通りという岐阜の中心街です。そこへ100メートルの幅に道路を広げ、延焼しないようするというものです。そのために道端の家屋の強制的な立ち退きをさせました。立ち退きの対象はほとんどが商店です。このように建物を壊して延焼を防ぐというような対策を採ったのですが、これが全く意味を成しませんでした。そして、ついに空襲が始まったのです。

この写真は美江寺観音や西別院がある地域を撮影したもので、まさに今、市街地が燃え始めています。これは岐阜駅です。東陸橋から撮ったものですが、壊れた貨物列車、作業をする人々、加納方面では煙が燻っています。これは翌朝の様子です。

正面にあるのが丸物百貨店という岐阜で唯一のデパートです。現在は中日新聞社のビルが建っている場所で柳ヶ瀬の入り口です。このように柳ヶ瀬の中心街が破壊されています。焼夷弾ですから鉄筋の建物は壊れないのです。内装は燃えましたが外壁が残っています。その屋上から見た岐阜駅方面の写真。これは西の方角を見た写真です。左側にある大きな建物は岐阜劇場といって、岐阜で一番大きな映画館でした。内部は完全に破壊されています。今、高島屋というデパートが建っている場所です。まさに柳ヶ瀬全域を俯瞰している写真です。そして、これは西柳ヶ瀬の風景です。

3日後に新聞が出ました。岐阜合同新聞と書いてあります。当時は一県一紙、一つの県で一つの新聞という指示の下、朝日や毎日、岐阜新聞も合わせて、合同新聞というものを発行していました。「決戦生活の再建への巨歩」、「岐阜市民の闘魂」などの見出しに加え、落ち着き先を斡旋しますよ、お米をあげますよ、医療費を出しますよ、そして、間髪を入れないで負傷者のケアをしていますと書かれています。焼け跡に対しては義勇隊が1万人で整備を始めている。紙面の真ん中には新しい復興の建物を建設して

いる写真が、もう素晴らしい活力です、空襲で全滅になっているにも関わらず、新聞紙面からは悲惨さは伝わってきません。しかし、負傷者のことは書かれておりますが、800名を超える死者のことについては全く書かれておりません。どの範囲がどのように焼けたという被害の大きさも書かれておりません。そして、一番書き出しのところを見ますと、「われわれは魔翼に勝ったのだ」とあります。アメリカの飛行機は魔翼と呼ばれました。「さあ、復興だ、生活再建だ。晴れ晴れとした身軽な岐阜市民のどの顔にも明るい色が躍っている。起き上がる気概の逞しさを県下の戦友たちに見せてやりたい。ここを一步も退きませんよ。この余熱の残る壕舎に頑張り抜こう。まずは決戦生活再建へ。市民の巨大な足音がとどろいていくではないか」とあります。空襲は大したことはない、空襲の被害はすぐに克服できる、再建できる、こんな調子でしか書かれていないということです。

これは岐阜市街地の消失した範囲です。先ほどの爆撃中心点として描かれた円とほぼ重なり合う状態です。この空襲の概要は先ほどお配りしたプリントにあります、その要約です。プリントに書いてありますので後で確かめていただきたいと思います。129機が岐阜市の上空に飛来し、爆撃をしました。これは2時間足らずのことでありました。被害規模を要約すると、死者数が約900名、当時の人口は17万2千人ほどであります。負傷者数はバラバラです。罹災者というのは家を失った人、焼け出された人ですが、約10万人です。焼けた家は約50%ということになります。

さて、復興が始まりました。バラックといわれる緊急の仮設住宅が造られたのですけれども、面白いと思うのはこの立ち木です。焼けた立ち木が電柱の役割を果たしています。電線が張られています。この下のほうには看板があり、ここにあった医院がどこへ引っ越したということが書いてあります。この写真は忠節町という、長良川の土手の上です。長良川の左岸の忠節橋の近くの土手の上に造られた仮設住宅です。ここで奥さんが焚き物をしていますが、右上のほ

うを見ますと、神山医療機器店という看板があります。この焼け跡で医療機器販売の看板を掲げておられます。このお店は現在の岐阜の中心部にビルを建て、介護用品等を取り扱っています。大変な生命力ですね。それからこの写真、斜めの広い道が柳ヶ瀬通りです。繁華街の中心です。その右下のほうに大きな建物が建ち始めています。これは柳ヶ瀬座という劇場です。まだ住む家もない、食べるものもない、大変な破壊の中で、劇場が真っ先に建てられているというのは面白いと思います。そして、空襲から2ヶ月半後の9月23日にオープンします。9月は7日間で9300人、10月は3万3400人、11月は少し減少しましたが、300人ほどしか入場できない劇場ですから、連日の超満員で大変な賑わいでした。当時はいかにこのような文化的なものにも飢えていたのかということが分かる写真だと思います。

この写真は終戦直後の人たちの服装ですね。モンペ、さすがに防空頭巾はもうなくなりましたが、小学生もこんな服装をしています。この写真は長住町、名鉄岐阜駅の斜め前の十六銀行本店の屋上から東の方角を撮影した写真です。この写真では、あちらこちらに大勢の人が集まって何か相談しています。これは恐らく、こういう焼け野原になった場所をどうやって再建していくかという相談をあちらでもこちらでもしていたのだと思います。右側の新しい大きな建物、これは名鉄犬山線の岐阜駅ですね。これが溝旗神社、真ん中にあるのが白山の火の見やぐらとあって、岐阜で一番大きかった火の見やぐらです。今、同じ場所はこういう状態になっております。斜めの道がありますね。このように復興をしているのを見ると、この破壊の大きさというものは、経済的にも大変な破壊だったということが分かります。次の写真の右上の大きな建物が十六銀行の本店です。満員のバスも走っています。戦争が終わって、モンペ姿から開放されて、通学ではスカートを着用できるようになりました。復興のエネルギーが溢れる写真です。

これが上加納墓地という市営の墓地に建って

いるモニュメントです。1948年に作られました。空襲から3年後に岐阜市仏教会、お寺さんの団体が作りました。この裏に書いてある文字を見ると、「跡を弔う人なく、無縁仏となってこの墓地に葬られし387人の人々を憶へば」とあります。亡くなった方はこの上加納に火葬場がありますから、遺体をここへ持ってきて焼いてもらいます。火葬された遺骨は遺族に引き取ってもらいます。ところが、誰も引き取り人が来なかった死体が387体、ここに残ったそうです。そのために、ここに穴を掘って埋めてありますという記念碑です。狭い岐阜市で900名が亡くなって、そのうちの400名近くが誰も引き取りに来られなかった、これはどういう状況でしょうか。一家全滅ということもあります。油が付着して体が焼けるのですから、男女の識別ができないというぐらいの黒焦げの遺体にもなります。だから、うちの子らしい、お母さんらしいといっても確認がない。なかには口を開けて、歯並びを見ると、間違いなくうちの子だと判明することもある。これが戦争なのですね。空襲なのですね。突然やってきて、あっという間に親子散り散りになる。一家全滅する。遺体も引き取ってもらえないということにもなります。

最後になりましたが、この写真をご覧になった方は多いと思います。長崎の少年です。撮影は9月ですから、原爆から1ヶ月ほど後のことです。これを撮ったのは占領軍の従軍カメラマンですけれども、少年は死んだ弟を背負って焼き場の前に立っている。この少年の前には穴を少し掘って、臨時の死体の焼却場があります。原爆ですから、大勢の遺体を処理しなければいけない。そこで順番を待っている。そのうちに係がやってきて、帯をほどいて、この子の弟を火の中に入れる。しばらくこの少年がそれを見ていたけれども、回れ右をして立ち去っていったと書いてあります。私、この写真を見ると、本当に身につまされるのです。当時、私はちょうど小学校5年生でしたから、このぐらいだったと思います。場所が場所ならば、自分がこのような事態に遭遇していたのだらうと。そして、この姿勢です。当時、徹底的に指導された直立

不動の姿勢です。目は正面を見据えよ、歯は食いしばれ、背筋を伸ばせ、指先はしっかり伸ばせ、足は30度に開け。その姿勢で死んだ弟の焼かれる順番を待つというのはどんな気持ちだったのでしょうか。両親が存命であるならば、このようなことにもならなかったと思います。これが戦争だということですね。それを肝に銘じて、二度と戦争をしてはいけないと、もう一度申し上げます。

あえて先程の年表では、戦後について触れませんでした。約40年かけて戦争の準備をした。約50年かけて戦争をした。その日本が、戦後約70年余り、一度も戦争をしていない。ひとりも戦死者を出していない。ひとりも殺していない。そういう素晴らしい歴史を築いております。大きな犠牲を払いました。そして、日本中は焼け野原になりました。その経験が、この時代を生み出しました。私も戦後、中学へ進学しました。新制中学ということで、6・3制が始まりました。そこで一冊の本が渡されました。『あたらしい憲法のはなし』という本です。その中に書かれた言葉ですけれど、「民主主義」、初めて聞く言葉です。「主権在民」、「基本的人権」、それから「地方分権」、「三権分立」、全部聞いたことのない言葉ばかりです。第九条のところには「これからの日本には陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といいます。でも、皆さんは決して心細く思うことはありません。日本の国は正しいことを他の国より先に行ったのです」と書かれています。なるほどと思いました。最後に駄目を押すように、「正しいことほど強いものではありません」と文部省が出した教科書に書いてありました。私たちは本当に納得しました。そうだ、軍事力を持っていても、強くても、負けるときには負ける、いつも勝てるわけではない。それならば、戦争はいけない、何も持たず平和に暮らしていったほうがいいのではないか。そういう想いをこのとき、子どもだけではなくて、大人もみんな持ったと思います。その意識が、その願いがこの戦後の72年間をつくってきたのだと思います。矢印が書いてあります。いつまでこの平和の時代を続けてい

くことができるのか。これを願いながら、私の話は終わります。失礼しました。

大前智文

ありがとうございました。では、次の高木様のご講演まで少し準備の時間を頂戴しますので、ご休憩ください。(休憩5分程度)

お待たせいたしました。では、引き続き「空襲体験を語りつぐということ」というテーマに基づき、「空襲体験を語りつぐ大垣の会」の高木正一様にご登壇いただきます。よろしく申し上げます。

高木正一

皆さん、こんにちは。「空襲体験を語りつぐ大垣の会」の高木です。会が発足して、今年で29年目になります。平成になってからこの会ができたというふうに考えていただけたらと思います。この大垣において、一番激しい空襲があったのが7月29日だったものですから、毎年7月29日に近い日曜日に会を開催してきました。

本日は資料に基づき、この大垣の会がどのような活動を行ってきたかという話をします。それから、大垣の空襲については、様々な場面で、特に若い方々が初めて聞く場合に「大垣にはこのような空襲がありましたよ」という資料として、いつもこの資料を使用しております。加えて、空襲については、米軍がどんな空襲をしたのかということも資料に載せてありますが、そこは省略をします。様々な空襲に関する概要もご説明させていただきたいのですが省略をさせていただきます。資料のなかには「南傾町第五部重要記録」というものがあります。これは大垣の歴史のなかでも大きな意味があるのではないかなと思っております。では前方にも資料を提示しながら、順番に進めていきたいと思います。

さて、大垣は6回の空襲を受けています。これは記録上6回ということで、他にも様々な話を聞きます。例えば、当時小学生だった方が機銃掃射を受けたという話もいくつか聞いております。そのようなことを空襲に加算すれば、もっ

とたくさんの空襲があったということになるかもしれません。ただ、本日は記録上の6回に沿ってお話をしてまいります。

私たちは「空襲体験を語りつぐ大垣の会」と申しますが、毎年7月に「空襲体験・戦争体験を語りつぐ集い」を開催しております。「会」というよりは「集い」と呼んでおります。最初は、空襲について参加者の皆さんからお話を聞きましょう、ということで始めました。そのうちに、やはり空襲だけが切り離されているわけではないものですから、外地での経験や、内地の生活の話をされる方、いろんなお話が出てきました。最初は「空襲体験を語りつぐ集い」でしたが、「空襲体験・戦争体験を語りつぐ集い」として行っています。

始まりは岐阜のように「何かをやろう」と思い立ったわけではありません。偶然にアニメ映画の上映会がありました。福岡の博多空襲を描いたアニメ映画だったので、博多だけじゃないよと、大垣も空襲があったらという意見がありました。では大垣の空襲についても経験された方にお話を伺いたいなということで、呼び掛けをしてもらいました。呼び掛けというのも、知っている方に声を掛けるだけではメンバーが狭くなるものですから、マスコミの方にもお願いをして、「こんな会をやりたいのだけれども記事にしてもらえないか」とお願いをしました。最初に集まっていた方はほとんど知らない方ばかりです。どんなふうになるかな、ご自身それぞれの経験を語り、それでいいのかなと思っていたのですが、参加された方からは大変よかったとおっしゃっていただきました。こういう集まりがあったので自分の想いを語ることができた、聞いてもらうことができた、他の人の想いを聞くことができた。そして来年もやってもらえないかと、このようになってまいりました。

そのアニメ映画のチラシです。これもチラシの裏です。博多祇園山笠には「子供山笠」というものがあります。それが7月だったかと思いますが、大人の山笠だけではなく、子供も一緒に参加するというので、町内の親御さんたち

が集まって昇き山を作成します。やっとできた、明日は山笠だというときに空襲に遭って、せっかく作ったものが燃えてしまう、そんなシーンがあります。このような山笠の写真は本題とは関係ないのですが、見ていただきました。

大垣は6回の空襲を受けています。先ほど申しましたが、「空襲体験・戦争体験を語りつぐ集い」は7月29日、大垣の大空襲に近い日曜日に毎年やりましょうということで定着してきました。ただ、皆さんに気軽に参加してもらおうということで、会則などはあえて作らずに、ということで皆さんが集まっていればいいのではないかという申し合わせを作りました。自らの体験を通して語りついでいこう、体験者が高齢化していくので、やはり今話したい、今聞きたいということがあります。それから、先ほど申しましたように、体験発表をするわけですから気軽に参加してもらおうと。だから、あえて会則や規約ではなく、申し合わせ事項ということで、また来年もこれをやりましょうねと。今年の参加者がまた来年も呼び掛け人になってお友達に来てもらう、自分が呼び掛け人になっているという気持ちで来年も参加しましょうと、そのように位置付けながらやっています。それから、「世話役は1年目よりの者が当分の間、受け持つ」と。この当分の間というものが実は30年近く続き、今年で29年目となりました。

最初、お話ししていただく内容は空襲体験となっていましたが、戦争体験の様々な思い出があります。国内はもちろん、外地から引き揚げてくるときに、特に朝鮮半島のほうから引き揚げてくるときには本当に大変な思いをしたと。大陸にいて、ソ連が参戦して、家族が亡くなったけども、自分は何とか命からがら引き揚げてくることができた。そういう様々な体験があります。すべてをお話することはできませんが、そういう積み重ねができてまいりました。現在は「空襲体験・戦争体験を語りつぐ集い」としてやっております。この集いは、「語りつぐ」といっても、若い子呼んできてあなたに語りつぐよ、というものではありません。実際に参加者の多くの方が直接体験された方です。必ずし

も次の世代にどのようにして語りつぐかということを確認に意識されているわけではありません。ただ、体験された方が自分の体験として、自分はこのようにして戦後を生き抜いてきたのだな、あの方もこのようにして厳しい中を生きてこられたのだなという想いを共有する場だと思っています。そして、若い方も何名か参加しておられますので、そのようなお話を聞いて、そのようであったのだなと思ってもらえるような場になっているかと思います。

もちろん、次の世代に語りつぐ取り組みも行っています。例えば、会場後方にも展示してあります、紙芝居仕立ての朗読劇を作りました。戦争展という企画展も開催しました。また、「集い」が開催される毎にビデオで撮影をしております。偶然にも事務局に協力していただいた若い方が得意でいらしたので、DVDを2枚ほど作りました。30分ほどのショート版と、1時間30分ほどのロング版です。なかなか良い番組です。これは「出演」された方にもお届けしました。何年か経過したときに、大垣の会でこんなことを語られた方がいたよという記録が少しでも残るように、こういう発言をされた方がいたのだなということが分かるように。そういう意味でも会の財産ができたのかなというふうに思っています。

これは紙芝居仕立ての朗読劇の絵です。この絵を使い、例えばこういうのがありますね、電気に黒い布が掛けてありますね、防火用水があって、何かモップなようなものがあるけど、これ何でしょうか。例えば、このように描かれている白い帽子について、ある方から「戦時中はかえて目立つから付けなかったのではないか」と言っていたこともあります。このように、それぞれの生活・戦争体験からご指摘を受けることもありました。一方、若い方にはこれを見て気が付いたことはないですかと、例えばガラスが飛び散らないように紙を張ったりしていますねと問いかけます。年配の方からはこれは間違いではないのかと、そのような指摘等も受けながら、様々な掘り起こしにつながっていると思います。

これは朗読劇の様子です。これは調理室で行っ

た企画の様子です。戦時中にはこのような食事をしていましたということで、すいとんを作りました。この写真では朗読中に子供が走り回っております。こんなふうに紙芝居を置いて、このような朗読劇を何回も行いました。

続けます。様々な体験をお持ちの方がおられます。自分のすぐ側を弾が飛んでいって、一歩ずれていたら、私はここで今話しておりませんという方もいらっしゃいます。B-29の様子ですね。これは金蝶園が燃えたわけではなのですけれども、防空演習の絵や写真を基に想像画で描いてもらったものです。これは大型爆弾（パンプキン爆弾）が落ちたときの様子を描いてもらいました。これもご指摘を受けました。この絵は、大垣城を北側から見たもので、B-29が左向き、つまり東向きに飛んでいます。このようには飛んでいなかったのではないかと。南から入ってきて、Uターンをして戻っていったのではないかとご指摘がありました。そのため、この絵を描き直して、向こうから飛んでくる絵に描き直したパネルが後方に展示してあります。

これは火の中を逃げている様子です。焼夷弾については、先ほど篠崎先生のほうからお話がありました。今日持参したようなものが、縦になって落ちてくる。屋根を突き破って住居の内部にまで。このような話もあります。不発弾が畳の中にめり込んでいた。恐る恐る取り出して、その中に油が入っておりますので、それで風呂を沸かしたら沸き過ぎてしまい、父親に叱られたなどという話があります。

これは原爆の絵を描いてもらいました。想像図ですけれども被爆直後の絵です。様々な写真を基に描いてもらいました。戦後のひとつの景色ということで描いてもらいました。

歌も作りました。様々な場面で歌っております。何かの集まりがあるときにはギターを片手に歌ってもらったりしますが、ちょっと中身の紹介は割愛します。

戦争展も行いました。そして、戦跡巡りもしました。駆け足でご説明します。これは水門川の辺りにあった農協です。現在の保健センターの辺りから南の方を向いた辺りです。そこに昔

は農協がありました。

これは新善光寺です。後でお話をする大型爆弾で亡くなった約20人ぐらいのご遺体をここに一時安置して、ご家族の方が探しにいらっしたというお寺です。ここの住職さんも5つか6つか小さいときだったけども、よく覚えているというふうに言ってらっしゃいました。

これは共立銀行と丸物百貨店です。そして、この建物、実は今でもあります。守屋多々志美術館になっています。これは郭町の交差点です。ここにもドラマがあります。

これは多分戦後の写真だろうと思います。戦中だとこんなに写真を撮ったりするようなことはできないと思いますので、昭和20年代の写真かと思います。これが守屋多々志美術館です。丸物、共立銀行、郵便局、商工会議所、こういった建物が残ったり、建て直されたりしたのだと思います。市役所は昭和12年にできたのですが、8年しか持ちませんでした。今度の市役所は大丈夫かなと、こうならないようにと願っています。

大垣駅です。市役所辺りから北のほうを見た写真です。大垣城も焼けてしまいました。お堀は焼けなかったのですが、国宝の天守閣は焼けてしまいました。

お勝山にも高射砲陣地がありました。杭瀬川にも高射砲がありました。巢南町にも高射砲がありました。高射砲はなかなか当たりませんでした。その腕が悪いというよりは経験のない人をどンドン兵隊にした結果です。飛行機乗りと同様に、経験のある人がいなくなってしまうものですから、高射砲もなかなか当たらないというようなことがありました。関ヶ原には弾薬庫が、今もその跡は残っています。

軍需工場も駆け足で見えていきます。昔の跡がほとんどなくなってしまっています。これは大垣駅からアクアウォークを見たところですが、数年前には古い工場跡がありましたが、もう全てなくなっています。これはオーミケンシ、同じ場所です。1992年ごろまではオーミケンシの工場があり、そこに高射砲の台座が残っていました。

これはロックシティです。今はイオンタウン

になっています。これは帝国繊維でした。これも軍需工場でした。今は労働基準監督署になっています。荒尾町には東海航空機がありました。和興紡績は村田製作所になっています。笠縫にはイビデンがありますが、ここは東邦レーヨン、その前は三菱重工があり、やはり軍需工場になっておりました。それからカネボウです。カネボウは三甲テキスタイルとなりましたが、辛うじてレンガの建物が今も残っています。

室駅の近くに東亜紡績があり、軍需工場になっていました。西大垣周辺の工場はほぼ全て軍需工場でした。イビデン、日紡、すべて軍需工場でした。ここは神鋼です。神鋼造機、コベルコの子会社ですが、バス停は神鋼前という名前が残っています。美和町の太平洋工業はなくなってしまっています。大垣鐵工はアル・プラザになりました。垂井に柳原工業がありましたが、イオン・マックスパリュウになりました。ただ、私の古いナビには柳原工業という名前がまだ残っておりますので、確かにここに柳原工業があったのだと分かります。日紡、現在のユニチカ。それから岡本工業は豊島紡績になっています。

3月3日の大垣の空襲についてお話していきます。これは大外羽地内、近鉄養老線が走る辺りに爆弾が一つ落ちました。人的被害はありませんでしたが、養老線の架線が少し損傷を受けたそうです。また、6月26日の空襲では北方町地内で死者5名とあります。これは岐阜経済大学からほんの数メートル北西に行った辺りに爆弾が落ちました。死者5名、田植え、農作業をやってらっしゃった、ほとんど一つの家族が亡くなっています。これらは戦略的には意味のない爆撃です。おそらく、これは各務原に行く途中、もしくは帰りに爆弾が余り、それを落とした程度だと推測できます。戦略的に全く意味のない空襲です。ただし、5名も亡くなっています。

7月13日、大垣市街から西のほうで被害が報告されていますが、これも計画的な爆撃ではありません。米軍の計画の中にはなかった爆撃だそうです。この日は一宮空襲があった日ですから、これも数機が編隊から離れ、気まぐれに落

としていったのではないかという空襲です。しかし、家屋が焼け、何名か死者が出る。記録では2名とありますが、やはり亡くなっている。

そして、7月24日です。これが模擬原爆の投下訓練でした。パンプキンという爆弾を落としたのですが、写真のものがパンプキン爆弾です。そして、これは長崎に落ちた「ファットマン」という原子爆弾です。そっくりでしょう。ちなみに広島には「リトルボーイ」と呼ばれた別のタイプの原子爆弾が落とされています。

さて、原爆を落とすには飛行機が自分で飛びながら、そのまま落とすわけにはいかないのです。自分の下で爆発すると大変なことになるので、飛びながらUターンをして落とし、自分は退避する。そういう特別な爆弾の落とし方をする必要があるため、投下訓練を日本の各地で行いました。日本全国で49発が投下されたと記録されています。そういう意味では、やはり米軍はかなり丹念にその練習をした上で広島、長崎に原爆を落としたことがわかります。記録によると、Uターンして退避するエノラ・ゲイがものすごい爆風や衝撃を感じたとあります。これは先程の写真です。水門川の農協があった付近に模擬爆弾が落ちたわけですが。

最近このような冊子を図書館で見つけました。これは『南頬町重要記録集』という日誌です。要するに、南頬の日誌のようなものです。7月9日の日誌には、岐阜空襲のことが書かれています。岐阜空襲の様子を見ると、その火の回り方などが大変だと。「到底初期防火活動など思ひも寄らざることを教へられたり」とあります。消火なんていうものはやっておれないよと。その結果、「遂に避難を主とすることに当局の方針一変を見る」とあります。これは、逃げなさいと「当局」が言いましたということです。この「当局」が誰かということが分かっておりません。推測するに、誰かがもうこれは逃げなければいけないと、どこかの比較的偉い方がおっしゃったのではないかと思います。

しかも、10日にも同じように、「岐阜市の戦訓に鑑み、従来の方針に訂正を加うるをやむなき」とあります。先ほど篠崎先生も触れられました

が、当時は防空法があり、「逃げるな、消せ」という命令がありました。しかし、その方針をもう訂正せざるを得ないということです。「其生命を護ることに重点を置かることになり」、これは事前退避ということです。次の日もそのように書いてあります。

しかし残念ながら、これが7月16日になりますと一変します。もしも逃げたら3日間ほど配給を停止する、住居は住む権利がないものとみなして取り壊す、または他の人に使用させる、このような通達が行われたという記録がここから読み取れます。これは誰かが、「やはり逃げる必要がある」と言ったけれど、どこかから圧力がかかって、「逃げるようならその配給も停止するぞ」と、もう一度通達を出し直せということがあったのではないかなと想像・推測することができます。これ以上のことは残念ながらまだ読み取ってはいません。しかし、このようなことが大垣市民の意識の中に多少でも入り込んでいたのではないかと思います。

岐阜空襲の話として、大垣から岐阜に支援に入った方の話があります。軍隊ですから、トラックに乗り込んで、大垣から岐阜の支援に行くのですが、まずは陸橋の上で待機をしていた。陸橋の上で様子を見てみると、とても熱くてその場には留まれない。そして、撤退命令が出た。岐阜の中は恐らく地獄だろうなど。そのような業火の中でバケツリレーや、火はたきで焼夷弾を消火しようなどということは死の行為だと。学徒動員のような形で軍隊にいった16歳の少年兵でもそう思ったそうです。空襲では逃げるが勝ちだと。

この方は大垣の郭町の交差点でも非常線に立たれたそうです。郭町の交差点は現在の守屋多々志美術館の場所です。そこに立って、空襲の際は警戒に当たるのですが、西へ逃げる人、北へ逃げる人、もう様子が分からない状態だったそうです。しかし、郭町の西や北へ逃げたのでは火の中に入っていくことになります。駅やお城の辺りは全部焼けています。ですから、南に逃げよというふうな指示を出すのです。指示を出すのですけれども、これは軍紀違反なのです。

「逃げずに消火せよ」が公式な命令です。ですから、自分たちがやっていることは軍紀に違反する、だけれども、やはり逃がさなければいけないというふうに思って逃したそうです。後になって、懲罰を課されるのではないかと心配していたら、2週間ほどで終戦になってしまった。やれやれ助かった、このような思い出があったと話されました。

これが空襲直後の大垣市街です。ここが大垣駅です。これが駅前通りです。これが郭町の交差点です。この黒いところが水門川です。この黒いところは大垣城のお堀です。今でこそ分かりますが、逃げている人は本当にどこに行ってもいいか分からない。そこで、とにかく南に逃げよと。なお、郭町交差点の南にガス会社があります。このガス会社が燃えなかったものですから大爆発にはならなくてよかったという話もあります。

これは昔のつちや柿羊羹です。現在と過去の姿が同じということは、この建物は焼けていないということです。つちや柿羊羹は写真のこの場所です。すぐ側までは燃えています。ここだけ焼け残っていますので昔の建物が残っています。本当に紙一重のようなことがたくさんありました。

さて、最後に紹介したい映像があります。

ビデオ映像①

80歳を超した年寄りの頼みは、どうか皆さん、自分の子供や地域の人に、戦争に行かないでくれと、絶対に戦争に行くなと止めて欲しい。これだけです。

ビデオ映像②

皆さんに声高らかに申し上げたいのはこれです。もうこんな酷く痛々しい残酷な戦争の体験は私だけで十分です。二度とやっていただいてはいけません。今後の世代の皆さまがたはどうか肝に銘じておいていただきたい。これが私の皆さんに対する最後のお願いでございます。長々ご清聴ありがとうございました。

高木正一

2人目の方は南方で終戦を迎えられ、1、2年して復員できた。もう家族と抱き合って喜んだ。自分だけ生き残って良いのかという気持ちもありながら、しかし、家族に会えたのはうれしかったとおっしゃいました。

これで最後です。護国霊苑に慰霊碑があります。この裏側に95名のお名前が刻んであります。大垣空襲は、大空襲では記録では50名、様々な空襲を含めて95名、これは公式記録ではないのですが、少なくとも95の亡くなった方のお名前があります。日本各地の空襲被害に比べれば小さいかもしれませんが。もちろん亡くなった方だけでなく、戦前・戦中・戦後と大変な思いされながら生きてこられた方たちばかりだと思います。このような方を偲びながら、新たに歴史的な発見なども探しながら、毎年の会を続けています。来年には30年目を開催することができるかと思っています。またいろいろお話などがありましたら、よろしく願います。これで終わります。ありがとうございました。

大前智文

篠崎様、高木様、本当にありがとうございました。ここでフロアの皆さまからのご質問を受け付けたいと思います。分からないところ、気になったところ、講演者のお二方にお聞きしたいところなどございましたら、お手を挙げてご質問いただければと存じます。よろしく願います。

質問者A

お二方ともありがとうございました。私は平成11年生まれです。戦争体験や空襲についてはなかなかお聞きする機会ない世代です。

まず質問として、篠崎先生のところで、岐阜市の非核宣言都市の署名運動がありました。焼夷弾による空襲なのになぜ核が出てきたのかなという素朴な疑問があります。

もうひとつ、防空法に関して「逃げずに消せ」という命令だったとありましたが、私の家の近くには防空壕があります。空襲の時には防空壕

に逃げ込むものと考えていたのですが、それは駄目なのでしょうか。

最後に高木先生の写真の中に防空演習とありましたが、それは避難訓練みたいなものなのでしょうか。お願いします。

大前智文

では、篠崎様からお願いします。

篠崎喜樹

私たちが要求したのは非核都市宣言です。なぜ非核になったのかというご質問だと思います。これは当時、岐阜だけでなく、全国各地で非核都市宣言をする運動が起きていました。岐阜もそれに倣い非核を入れて要求をしました。ところが、市議会では国策の問題だとして否決されました。ただし、その翌年に市議会に出された平和都市宣言のなかには非核という言葉が入っており、核兵器を持ち込まないということも書いてあります。非核都市宣言を拒否した自民党が提案した平和都市宣言に、非核という言葉が入っていたのです。このことについて、野党から出されたものを拒否する口実としてそれを使っただけで、やはり平和であり、非核でなければいけないという気持ちは自民党の人たちの中にもあったと私は考えております。文章の中にはその文言が入っているのです。そういうことです。

政府は防空壕づくりを奨励しましたが、これは待機壕で、一旦避難しても、すぐに防火に出ていくための一時待機をするためのものと指導していました。防空壕というのは地面を掘って、そして屋根をして、その中に逃げ込むというものです。爆弾でしたら、その爆風とか熱線が飛びますから平地にいたら吹き飛ばされたり、焼かれたりします。だから、それには有効でしょうけれども、焼夷弾のように火の海になる、酸欠になる、高温になる、そのような場所で壕の中に入っていたら、むしろ、呼吸困難、窒息、あるいは蒸し焼きになる。だから、逃げる必要があると思います。

高木先生の話にあった、あの証言をした少年

兵だった方。郭町で逃げろと指示をただけではなくて、自分も逃げる途中で壕のある所へ行っただけで、壕にいては危ないよと、逃げなさいと、言って回ったというふうに証言されています。だから、実際に火の中にいた方たちにとっては、防空壕などというものは役に立たない。むしろ危険だ。壕の中におられて亡くなる人が多かったということもあります。

そして、現在は北朝鮮問題もあり、防災訓練や防災対策が盛んに行われていますが、本当に政府のやろうとしていることを信用して良いのかどうかということは検討していかなければならないと私は思っております。よろしいでしょうか。

高木正一

防空法は、特に民間人がこういうことをやりなさいという法律です。何回か改正されており、例えば灯火管制なども防空法に記されていたと記憶しています。明かりが漏れるとそこが標的になるため、民間がとにかく協力して明かりが漏れないようにしなさいということも防空法の範疇です。このなかには消火活動に当たりなさいというのがあります。実際に、例えばお寺が燃えていると、そこだけ何とかしなければならぬということでは消したという例はあります。しかし、街中が全部、あそこもここも燃えとるときにはとても消せるものではない。岐阜市の様子を見てみると、消しなさいというのはとても当てはまらないということです。

ご質問にあった防空演習や防災訓練についてです。防空演習は防災訓練のように地震があったから逃げなさいという話ではないのです。信濃毎日新聞に桐生悠々という人がいました。日本が空襲に遭う前に関東で防空演習が行われたという事に対し、桐生は「関東防空大演習を嗤ふ」という記事を書きました。要するに、爆撃を受けるような事態ということは、日本は制空権を失っているのだから、もう勝てるのか、そういう話ではないよと書いたのです。それに対し退役軍人や関係者から様々な圧力を受けて、桐生は信濃毎日新聞を辞めることになりました。

現代的な感覚からすると、桐生の感覚や認識は当たり前のことなのではないかと思います。

質問者A

ありがとうございました。

大前智文

では、もうお一方ぐらい時間はありますけれども、いかがでしょうか。

質問者B

今日はありがとうございました。岐阜と大垣の空襲について、やはり戦争になると、非戦闘員がこのような悲惨な状況になるということがはっきりと分かりました。

岐阜県下の空襲としましては、岐阜、大垣、それから各務原があると思います。岐阜や大垣はいわゆる人口密集地帯を焼夷爆弾で焼き尽くす、中小都市への焼夷弾攻撃になると思いますが、各務原は旧陸軍の飛行場がありました。軍需工場もですね。航空機があり、岐阜県出身の映画監督の篠田正浩さんが講演などで、旧制中学時代に勤労奉仕で工場へ行っていたという話もあります。グラマンの機銃掃射ですか、随分低空に来て、パイロットの顔も見えた、はっきり見たというような証言をされています。これは岐阜とか大垣とは違つかちの空襲ではないかと思います。各務原の空襲についてもお聞きできればと思います。

篠崎喜樹

岐阜県の空襲、都市に対する攻撃としては岐阜、大垣、各務原の三つです。それぞれ特徴があり、各務原は軍需工場、あるいは軍事基地に対する爆弾攻撃です。そのために工場やその周辺は大きな被害を受けましたが、人的被害はさほど多くなかった。岐阜は夜間、焼夷弾攻撃で約900名亡くなった。これが一番大きい。大垣の場合の空襲というのは夜間焼夷弾、爆弾、爆撃もありましたし、それから原爆模擬爆弾ですね、パンプキン爆弾の投下という、これも岐阜県でただ一つだけの特徴です。

大垣空襲の一番の特徴は、先ほども高木先生がおっしゃったように、死者が夜間焼夷弾攻撃で50名ということだと思います。岐阜は900名です。格段に違います。大垣空襲と同じ晩に、例えば青森市が攻撃を受けています。大垣のほうが投下された焼夷弾のトン数は多いのですが死者は50名、青森は1400名、格段の差がついています。

この差は一体何か。先ほどもお話があったように、「当局」が初期防火など思いもよらない、とにかく、まず初期退避だと。もう法律を違反しても、あとは逃げなさいというような布告を出した。これをすぐ後、取り消してはおりますが、それが市民の中に浸透しており、とても消せるものではないぞと、やられたらみんな逃げようということが意識に刷り込まれていたということではないかと思います。だから、空襲が始まったらみんな逃げる。加えて、先程の少年兵のような方、止めるべき人が逃げなさいと指示をした。そのためにわずかに50名でおさまった。これは本当に、この「当局」とは何者か、これを明らかにできれば杉原千畝さんのような、1000名からの人命を救った人が明らかになる。それがまだちょっと分からなくて、探しているところなのですが、これが大垣空襲の大きな特徴だと思います。

また、グラマンなど艦載機の攻撃は岐阜市など各地で見られますが、多治見では走行中の列車が襲われ、20名を超える犠牲者を出しています。

質問者B

ありがとうございました。

大前智文

ありがとうございました。では、最後に本講演を企画させていただいた立場から、個人的な感想を述べさせていただきます。

本学は地域貢献の大学を目指しながら、この場所で教育、研究、スポーツなどの諸活動をさせていただいております。このような諸活動の大前提には「平和である」という状況や環境が必要です。このことは「平和でない」という反

対の状態を想起させ、岐阜や大垣には平和でなかった時代があったということを読み起こさせます。

本日のご講演を聞き、今まで知らなかったことがたくさん出てきました。また、新しい発見もどんどん出てきていることを知りました。70年以上も前のことですが、現在でも再発見、あるいは新事実がどんどん出てきています。私たちは常に知るといふこと、考えるといふことをしていかなければいけないのではないかと強く思います。

本日はキーパーソンであるご両名にご登壇いただきました。人がいなければ戦争体験は風化していくとご両名ともがおっしゃられました。そのとおりだと思います。戦争体験を語りつづということが自然発生的に起こるといふことはありません。やはりご両名のようなキーパーソンがいらっしゃることにより、多様な形で活動が進んでいくということが明確になりました。

ただ、人間にはそれぞれの考え方があります。本日は「想いをつなぎ、平和を考える」というタイトルにさせていただきました。想いは人それぞれ、考え方も人それぞれ、平和のあり方も人それぞれだと思います。私はこの場で戦争とはこういうことだ、あるいは平和とはこういうことだなどとお話するつもりはございません。各人がどのように考えていくのかは自由です。しかし、考えるためにはまず事実を知らなければならぬ、あるいは常に考え続けていかなければいけないと思います。

話は変わりますが、これまで戦争体験を身近に感じられるアニメーションとして、「火垂るの墓」や「はだしのゲン」などが人気を博していました。近年では、「この世界の片隅に」というアニメーション映画がロングランを続けております。舞台は戦時中の広島、呉。戦時下であっても日々の生活を温かく、力強く生き抜いていく女性とその家族の姿が描かれています。とても新鮮で、現代的な感覚に富んだ物語です。このようなものからも新たな知見を得ることができると思います。

では最後に、森誠一先生に講演会を締めさせ

ていただきたく存じます。森先生、どうぞよろしく申し上げます。

森 誠一

本日は本当にありがとうございました。篠崎さん、高木さん、本当に貴重なご講演をありがとうございました。感想といふことで締めさせていただきます。

篠崎さんのお話には非常にリアリティがありました。ご自身の体験を踏まえて、かつ、焼夷弾まで持ってきていただき、リアルなお話をいただきました。前のホワイトボードにもありますが、この72年間の平和というものが、日本人310万、アジア人2000万という尊い命の上であり、今、われわれは生かされているといふことを強く痛感をいたしました。

高木さんのお話では、高射砲の台座や様々な遺物や遺構が今どんどん消失していっているとありました。誰も人はいずれ死にます。ですから、語りつづ人はそのうちなくなる。新しい世代が語りついでいくといふことはもちろんあります。ただ、個人の記憶の口承だけではなくて、物や記録、あるいは戦争の遺構といったものを残していくといふことも、我々がやっておくべき営為ではないかといふことを痛感いたしました。

本日、お二方のお話を伺いましての感想をもって、締めのあいさつとさせていただきます。本日は長時間にわたりご参加いただきまして有難うございました。今後ともよろしくお願い致します。

大前智文

これにて、本講演会を終わらせていただきたく存じます。後ろのほうに高木様がお持ちくださったパネル展示等もごございます。また、お手元にアンケートを配らせていただいております。もしよろしければ、アンケートをご記入の上、出口にあります回収ボックスに入れていただきましたら、今後の参考にさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

(了)

■篠崎喜樹氏 資料

岐阜空襲作戦は、このように行われた

アメリカ軍「作戦任務報告書」から作製

作戦任務の番号	260
中小都市空襲の 攻撃した部隊	第7回（仙台・堺・和歌山・四日市とともに） 第21爆撃機集団 第314群団（グアム島に基地）
基地から飛び立ったB29 岐阜市を爆撃した機数	135機 129機（1機他の目標へ、5機役にたたなかった）
（1945） 攻撃した日時（日本時間） 爆弾を投下した高度	7月9日 23時34分～10日 1時20分 4,500～4,800m
天候 爆撃中心点（MPP）	晴れ、視界を妨げるものはなかった 061062（徹明町通りと金華橋通りの交差点）
投下弾 M47 焼夷爆弾 E46 集束焼夷弾 計 M46（閃光弾） 破壊した面積	12,221発 421.4トン 2,387発 477.4トン 14,608発 898.8トン 54発 8.7トン 5.0 km ² （建物密集地 6.76 km ² ） 建物密集地の 74% +市街地外 岐阜駅および、共同毛織、富士ガスなど8工場 名前の分からない8工場など破壊 北東、東。および南の小地区が無傷で残った。
日本軍の反撃	10機の敵戦闘機から3度攻撃を受けた。 地上からの高射砲は不正確だった。
失ったB29	1機 帰路エンジンに被弾、火は翼に広がった。 脱出後、空中爆発、乗組員11名全員は救助された。

原文の計測値は米国式のヤード・ポンド法で記してあるが、1フィート≒0.350m、
1平方マイル≒2.590km²、1インチ≒2.54cm、1米トン≒0.907tで換算して示した。

■篠崎喜樹氏 資料

はっきりしない空襲被害

	昭和20年 8月30日 岐阜合同新聞	戦災復興誌 (建設省)	米軍調査団 報告書	経済安定本部	松尾吾策 「八十年の回顧」
死者 (人)	818 (0.5)	863	856	887 (不明17)	890 (0.5)
負傷者 (人)	1,059	515 (0.3)	1,205	540	5,600 (3.2)
全半壊家屋 (戸)	20,303	20,427	20,427	19,525 (49.3)	20,530 (51.8)
罹災者 (人)	100,000 (57.2)	86,197	99,730		85,237 (48.8)
焼失地域			1.93平方マイル 破壊=74% 目標の107%		170万坪

昭和19年の人口174,676人 戸数39,604戸 ()内はパーセント

けた違いに多かった岐阜市

投下弾1トンあたりの被害

	死者 (人)	負傷者 (人)	全半壊家屋 (戸)	罹災者 (人)
岐 阜	1.0	1.3	17.8	110.9
一 宮	0.4	0.4	6.2	25.8
桑 名	0.3	0.2	4.4	19.4
大 垣	0.2	0.4	7.5	37.7
岡 崎	0.1	0.2	7.4	31.5
平 均	0.4	0.5	7.9	40.3

■篠崎喜樹氏 資料

本田幸恵さんの日記

梅林国民学校（梅林小）高等科二年（今の中学二年生）の本田さんが、待避する際これだけを救急袋に押し込んで持ち出したという日記帳には次のように記されている。

七月九日 晴れ（一九四五年）
 午後九時半ごろ警戒警報発令、一〇時頃空襲。
 私は水枕で寝ていたが飛び起きて身支度した。頭に水でぬらした手ぬぐいを巻いて待機していると、空襲のサイレンが鳴り終わるかそこらに、B二九が頭上を通過し、照明弾を落とすといった。十方真昼のごとく忽ち県病院（岐大付属病院あと）の近所が燃えだした。刻ごとその火は類火し、天は真紅に染まり、敵機の爆音入り乱れて全く戦場と化した。
 近所は人、人、で苦しいぐらいい。防空壕で待避している人、遠近で呼び合う声―等を目の当たりに見て私はなんだか責められる気がした。
 こんなに騒いで命令もそこに山へ逃げるあさましさ。でも今はこんなことを言っている場合ではない。
 私はしばらくの間この様子を眺めていましたけれど、もう近所は類焼して身に危険が迫りつつあることに気づいて親子三人で避難しました。
 父は一人踏み止まって防火に努めなければなりません。途中機銃掃射する怨敵機をにらみつつ避難しました。
 道行くひとびとは互いに励まし合って行くのである。空からは天の川の星が一度に落ちてくるかと思うほど焼夷弾が落ちてくる。
 ああ、敵が落としさんざんあばれ狂うのにどうすることも出来ず見ている。その切なさ、口惜しさ。友軍機よ、何処に何をしているのか、早く出てきて一撃のもとに撃ち殺せないのか――。
 東の空はそろそろ白み始めたのに未だ市内は煌々として互同士の顔を照らしている。やがて爆音は絶えて警報が解けたらしい状況となった。けれど市内は今を盛りと燃え続けているではないか――。
 消防隊も兵隊も来て勇奮敢闘しているながら火には猫の手一つ出せない有様だ。

七月一〇日 曇り
 とうとう夜が明けた。私達はひと先我が家へと足を運んだ。見わたす限り焼け野原――。未だ燃え続けている所さえある。よくも短い時間にこのようにあわれな有様にしてしまったではないか。実に憎き米鬼の奴！
 思い知らせてやる時を待っているが良い！我が家は類焼で、後影もなく、野菜畑に転々とみんなが休んでいる。
 一〇日午前八時頃、にぎり飯が渡った。田舎の方から、わざわざ作って持ってきてくださったのである。昼にもおにぎりを頂いた。向こうからトラックが来た。上にはいつばいの人がおにぎりを持って叫んでいる。「朝から一度もおにぎりの当たらなかった人にお渡しします！」と、「お気の毒です。しっかりと頑張ってください、元気にやってください。」と大声を張り上げて叫んで行かれました。「どんな相談にも乗りますから公会堂（今の市民会館）前の国民義勇隊までお出で下さい。」あらゆる事に出来る限りの活躍ぶりです。困難に合うと、互いに親切に励まし合うのを見て私は何ともいえない嬉しさに満たされて自然微笑まざるにはいられません。やはり、大和撫子の精神は宿っている。日本人のみ持つ大精神は宿っていた――。
 木陰に休んでいるいろいろのことを考えていたので今まで気が付かなかったけれど、太陽が真紅であった。何時の日か、このような事があった事を記憶している。これはどうしても凶兆である。空け未だ淡い赤色で懐かしい青空を見ることが出来ない。私はつくづく思った。丸で夢を見ているようだ。真実とは思えない。科学の力は大了なものだ。九日く一〇日午前六時迄八時間燃え続けたのだ。可愛がっていた鶏が死んだ。

■篠崎喜樹氏 レジюме

岐阜空襲を追って —「岐阜空襲記録する会」の活動—

1. 岐阜市平和資料室開設までの経過

(1) 「岐阜空襲を記録する会」の発足 (1974. 9)

「岐阜県下の空襲により県民が受けた惨禍と戦時下の生活を県民の手で記録して、これを現代に問いかけ、さらに後世に伝え、再びこのような歴史を繰り返させないように、真の平和を築くひとつの力となること---」(規約第三条 目的)

「資料の永久保存などを目指す資料館の建設---」(第四条) を目指し

対県・対市交渉、調査・記録活動、「体験を語る会」・「空襲展」の開催、ニュースの発行、書籍の出版、スライド・パネル・ビデオの作成と貸し出し

「被災30周年 岐阜空襲展」中日新聞、丸物百貨店と三者共催 4万人の入場 (75. 8)

(2) 岐阜市が、「岐阜市平和都市宣言」(1988. 6)

岐阜市非核都市宣言請願署名運動(1983. 7~84. 2)

「岐阜市非核都市宣言をめざす運動推進センター」(記録する会が事務局)

呼びかけ人325人、請願署名27, 471人提出

「常設展示場---を市当局や議会に要求し、---」 22対25で否決しながら
市政100年、岐阜市議会が、「岐阜市平和都市宣言」を決議 (1988. 6)

(3) 平和都市として何をするのか

岐阜市は年間500万~700万円の「平和都市宣言啓発事業費」を予算化する

野村市議が平和資料館の設置を、蒔田・浅野市長に迫る

岐阜教組ら7団体が「平和施策に関する要望書」を市長に提出 (1992. 6. 6)

(4) 「岐阜市平和館をつくる会」(記録する会事務局)を発足 (1993. 4. 25)

岐阜教組、コープぎふ、母親連絡会、平和遺族会など24団体で署名運動、市長交渉など

市側は「平和資料館は早い時期に実現したい。資料の収集、発掘は時期を失すると滅失するので、平成5年から収集を行う」(1992. 9)

「戦災50年をめどに、館を前提とした資料収集を平成5年度より」(1993. 2. 20)

「戦争・戦災資料収集に関する委員会」をスタートさせ (1993. 9. 3)、95年7月までに329点の資料を市民から収集し、岐阜市歴史博物館で保管。行政視察として「ピースおおさか」「国際平和ミュージアム」見学

つくる会も 「平和ミュージアム見学の旅」(93.6 43名参加)

- 「岐阜の戦争遺跡」の刊行 (93.8 2000部 知事・市長などから推薦文)
- 「'94 ぎふ平和展－50年前は戦争だった」(94.8.11～15 岐阜市文化センター 入場者 3,225人 パンプ 4,000部)
- 「市民平和講座」(94.1～7 6回開催)
- 「子らに伝えよう－ぎふ戦争と平和展－」(95.8.4～8 中日新聞共催 近鉄百貨店 入場者 18,000人)
- 「岐阜空襲の夕べ」(毎年7月)
- 「ミス岐阜と青い目の人形－日米人形交流展－」共催(96.9.27～10.3 岐阜高島屋 入場者 13,000人)
- 「空襲・戦災を記録する会 第28回全国連絡会議 岐阜大会」共催(98.7.19～20 グランヴェール岐山 191人 市長・助役出席)

(5) 「平和資料室」実現に向けて

「平和資料室」を四次総に位置づける(96.3月岐阜市議会)

「国際交流」の部分に、「本誌は昭和63年に『平和都市宣言』を行いました但し世界に目を向けると平和を脅かす様々な出来事が起こっており、**平和に対する認識を新たにする必要があります。戦争体験者が減少し、戦争に対する認識が風化しつつある今、戦争という悲劇を繰り返さないためにも、戦争について学び、平和の尊さを認識する必要があります**」として「平和意識の高揚と展示機能の充実＝人類にとって永遠のテーマである平和意識の高揚を計るため飢餓、環境破壊をはじめとする種々の視点から**資料展示を通じ、広く啓蒙活動を行います**」と位置づけ、所管を市教委文化課から総合企画部文化行政推進室へ移す。(96.4)

* 岐阜市主催平和展「子供たちへ伝える平和のための資料展」に協力

「岐阜空襲」96.7.9～30 「戦時下の暮らし」(8.5～30)」

以後開設まで4年間開催

* 岐阜駅西陸橋取り壊しに伴う戦災遺物の発掘(97.3.27 7.26 8.13)

* 市は「市民文化活動拠点施設整備基本構想(案)をいったんは策定(98.3)

市民会館改築後の施設の2階中央図書館の一角に、約135㎡の「平和資料室」を配置
→中止

2, 「平和資料室」オープン (2002. 1. 26) ハートフルスクエア-G

(1) 規模・運営

* 展示室110㎡ 倉庫10㎡ 文化生涯学習課所管

* 岐阜市空襲と戦時下の市民生活をテーマにした展示 (常設展)

左手-空襲以前=防空、戦意高揚、米軍の偵察と空爆準備、焼夷弾

正面-岐阜市の焼け跡パノラマ写真、空襲遺物

奥の平台-岐阜市焼失地帯を示すジオラマ

手前の平台-空襲遺物 (発掘品)

右手-空襲以後=焼け跡、バラック生活

ガラスケース-防空用品、子供玩具、代用品、雑誌、グラフ

ほかに竹中彰元 (反戦僧)、サイパン玉砕の郷土部隊、軍隊生活など

空襲を記録する会制作ビデオ随時上映

* 午前9時から午後9時まで開館、休館日は月1回 (最後の火曜日)

* 無人、監視ビデオ

* 4月より「ハートフルスクエア-G」を「岐阜市教育文化振興事業団」へ民間委託するが、「平和資料室」だけは文化生涯学習課 (今は男女共生、生きがい推進課) の所管

* 「岐阜市平和資料室・友の会」の発足 (2004. 12. 23) 会員128人

講演会、見学会、「空襲の夕べ」、総会

(2) 子供たちに伝える平和のための資料展・特別展展示制作 (会制作分)

「戦時中の教科書」(04. 8~)

「開戦、戦中の暮らし、そして空襲」(05. 7. 9~31)

「戦争中のお母さんは、大いそがしー大日本婦人会岐阜支部の活動ー」(06. 7. 9~07. 7. 20)

「学校もたいへんだったー戦火の中学生日記ー」(07. 7. 22~08. 8. 5)

「反戦を貫いた僧 竹中彰元」(08. 7. 19~09. 7)

「岐阜の戦争遺跡」(09. 7~10. 8)

「岐阜空襲写真展」(10. 7~8)

「焼け野原から再生する岐阜の街ー新発見写真からー」(10. 7~11. 7)

「岐阜空襲の記録ー破壊からの再生ー」(20117~12. 7)

「市民と兵士の防空」(12. 10~13. 7)

「狙われた故郷ー新公開写真ー」(2013. 7~)

「戦争の時の子どもたちー欲しがりません勝までは」(14. 7~)

「戦争の悲しみをえがく板津包信作品展」(15. 7~)

「進め一億火の玉だ！~「本土決戦！」のころの少年少女たち~」(16. 7~) ◆

「戦うぼくら、少国民！~岐阜空襲と、立ち向かった子供たち~」*◆

「焼け野原からの再出発~そして今」(17. 7~) *◆

(◆メディアコスモスでも展示)

(3) 見学ガイド

小学校、社員研修、教員研修、人権教育研修、県外の戦災・空襲記録する会、メディア

(4) アンケートの反応 (2004.5までの常設展 875通)

*興味をそそられる 88.9% 普通 7.9% 興味を持ってなかった 1.4%

*よくわかった 65.7% 多少わかった 25.9% わかりにくい 2.2%

*説明の必要はない 9.2% 文字説明がほしい 38.8%

スタッフの説明がほしい 36.3%

*印象に残った展示物=戦災遺物、焼け跡の写真、焼夷弾、丸物の壁、米軍作製の地図、
竹中彰元の裁判記録、遺言書、陶器の焼夷弾---

3. その他の活動

(1) 平和講座 小・中・高等学校、児童館、自治会、企業、民間団体、市民など

(2) 最近の研究・資料収集 大垣空襲時の「通達」 勤労働員中の女学生 当時の玩具
E46収束焼夷弾 M69不発弾 モンペ 防空頭巾 布かばん
など

(3) 主な刊行物 写真集『岐阜・各務原・大垣空襲』1975年
体験記集『火の海からの証言』1976年 ()
『岐阜空襲誌』1976年
絵本『芽吹けミヤコよから～子供たちに伝える岐阜空襲』1985年
(岐阜県学校図書館協議会推薦図書、全国学校図書館協議会選定図書)
『岐阜の戦争遺跡』1993年 岐阜県知事、岐阜市長の推薦文
『岐阜も戦場だった』2005年 (「平和資料室友の会」参加で)
写真集『岐阜空襲の記録』2013年 (美江寺観音と共同制作)
映 像 『私たちの街がたかれた～岐阜、各務原、大垣空襲の記録』(32分)
『「芽吹けミヤコよ」より』(27分)
『焦土：岐阜』4分 (米軍機空撮)
『岐阜空襲アーカイブ』2017年 (愛知淑徳大國広由紀さん制作に協力)
ホームページ開設 1998年 <http://yosisi.sakura.ne.jp> [岐阜平和通信](#)

(4) 他団体との交流 「全国空襲・戦災を記録する会交流会」(毎年8月)
「戦災・空襲記録作り東海交流会」(毎年12月)

(2017.11 篠崎 喜樹)

■高木正一氏 レジюме

空襲体験を語りつぐということ

2017/11/25

空襲体験を語りつぐ大垣の会 高木正一

1. 空襲体験を語りつぐ大垣の会について

(1) この会の毎年のとりくみについて

大垣は記録では6回の空襲。そのうち一番激しかったものが、7月29日の未明の空襲。「空襲体験・戦争体験を語りつぐつどい」は、その7月29日に近い日曜日に開催。

例年、大垣市役所の記者クラブで、開催を記事でお知らせいただけるよう要請。記事にしてもらうのは、私たちの知らない人に伝えたいから。当然、知らない人から問い合わせが。

○この会のはじまりは、1989(平成1)年。「火の雨が降る」という福岡空襲を題材にしたアニメ映画の上映会から。

- 空襲は大垣にもあった。語りたい知りたい。
- マスコミの協力も得て参加呼びかけ。20名ほどの参加者。⇒当初は単発の会の予定。
- 大変有意義だったので来年も開催できないか。

○会の名称は「空襲体験を語りつぐ大垣の会」。

- 毎年開催の「つどい」の名称は、『空襲体験・戦争体験』を語りつぐつどい
- 空襲体験だけでなく、戦争中の生活について、外地での体験、引き揚げ体験、抑留体験など。
- それぞれの方の、それぞれの思いで体験を語ってもらう。
- 戦後世代、若い世代の方の参加も。その事実を、次の世代、自分の子どもに語りつぎたい。例年50名ほどの参加者がいます。

(2) この「つどい」と「会」の特徴・役割

- 「つどい」がスタートした当初、参加者の多くは空襲・戦争体験者の方々。
 - 回を重ねるにつれ、戦後世代、若い世代の参加者も増える。若い世代からも感想などを発言。(聞くだけの参加もOK。発言をしなければならない、というものではない。)
 - どちらかと言えば、「記憶」を大事。体験の日時、場所など、正確である方がいいが、必ずしも正確に日時や場所を記憶しておられない方も。
 - 客観的な日時等は、資料等からも探ることができるが、その方の体験、体験そのものの記憶がある意味大事なことでもある。
 - ナマの体験を語ってもらう、それを聞き、それを、体験者の方も、戦後世代の人も、各自のものとして持ち帰っていただく。それもこの「つどい」の意義ではないか。
- ※会則は作らず、会、つどいを続けていくための「気軽」な申し合わせ事項。
- 一つの出来事、一つの爆弾投下、それぞれの位置からの体験をつなぎ合わせると、噛み合った事実が掘り起こされることにも。それらは事務局などでの、後日のゆっくりした作業に。
 - 紙芝居仕立ての朗読劇、歌「あなたに伝えたい」、戦争展、戦跡めぐり、DVD作成。

2. 大垣空襲および日本への空襲についての若干の整理

大垣空襲の状況 以下、柳瀬博さんの「水の都に火の雨が降る 1995年発行」より抜き書きしたものです。(基本的には、「新修大垣市史」を資料として使っておられるが、一部独自の調査も反映されている。)

その1. 大垣空襲について

1944(昭和19)年11月24日 B29大垣上空偵察
警戒警報 午前11時50分、空襲警報 0時5分、
空襲警報解除 午後2時30分、警戒警報解除 午後2時45分
高高度の偵察だったが、初めて見るB29に市民は衝撃を受けた。

第1回空襲 1945(昭和20)年3月3日 午後11時18分～0時30分の間、曇
西大外羽地内田んぼに十数発の大型焼夷爆弾投下 B29が一機
近鉄養老線の通信線切断、路盤に大穴

第2回空襲 1945(昭和20)年6月26日 午前9時30分頃、曇
安八郡中川村野々南地内(現：大垣市北方町)に爆弾一発を投下 B29が一機
田植え中の村民5名が爆死、2名が重軽傷、20個くらいの大穴
片鋼集束弾(破片集束弾、ボール爆弾のようなもの)破片をまき散らし破壊殺傷
※同日同時刻頃、別のB29一機が、象鼻山南斜面(養老郡日吉村地内)にも投弾

第3回空襲 1945(昭和20)年7月13日 午前2時頃、雨
B29 二機が、焼夷爆弾 約140発を投下、
久瀬川町・神田町・西崎町・丸ノ内・高砂町・西外側町・東外側町・荒尾町・
静里町・不破郡青墓村榎戸・安八郡中川村などの一部が焼失
死者 2名、重軽傷者 約100名、焼失家屋 102戸、半焼家屋 20戸
※同日一宮空襲、この一宮空襲のうちの二機が大垣にも投弾と思われる。
※なお岐阜空襲は7月9日

◆被害状況として、「火の雨」には、死者2名、重軽傷者約100名、焼失家屋102戸、半焼失家屋20戸。「岐阜空襲史1978年発行(柳瀬さん執筆箇所)」には、死者20名、重傷約100名、焼失家屋100戸、半焼家屋20戸、資料・新修大垣市史とあり、(注)として、死者20名とあるが2名の誤りと思われる、とある。

第4回空襲 1945(昭和20)年7月24日 午前8時40分頃
B29 一機、一万ポンドTNT爆弾(4.5トン)、当時は1トン爆弾といわれていた
高砂町水門川左岸側面、岐阜県農業会安八支部と周辺の民家が全半壊
死者 12名、重軽傷者 十数名、全壊家屋 約20戸、一部損壊 約100戸以上
※第509混成群団による原爆投下訓練。長崎型のファットマン(プルトニウム原爆)と同型のTNT爆弾。パンプキンと呼ばれた。
◆「岐阜空襲史1978年発行(柳瀬さん執筆箇所)」には、死者20名、重傷100名、とある。
また、回想などで「善光寺に並べられた20の遺体……」の記録(記憶)もある。

第5回空襲 1945(昭和20)年7月28日 午後0時頃

艦載機グラマンF6F 四機(二機ずつのダブルペア)が市内上空を超低空飛行、
揖斐川電工青柳工場、神鋼兵器工場を小型爆弾と機銃で銃爆撃、死者 2名

第6回空襲 1945(昭和20)年7月29日 午前0時52分～午前2時50分

B29 九十機、焼夷弾 21,000発、大垣市内中心部がほとんど焼失

死者 50名、重軽傷者 100余名、焼失家屋 4,900戸、罹災人口 30,000人

- ・市役所、税務署、西濃地方事務所、裁判所、養老華園、郵便局、大垣城、大垣中学、大垣高女、興文・東・北・宇留生・静里各国民学校、近鉄西大垣駅、等々、および各工場等が焼失

その2. 日本への空襲について

○ドゥリットル空襲(最初の本土空襲)

- ・1942年4月18日、12:15 B25が首都を空襲・爆撃

※ミッドウェー海戦。1942年6月5日～7日。日本海軍の敗北。

○B29、成都からの北九州空襲(B29による初の本土戦略爆撃) ・1944年6月15～16日

○サイパン、テニアン、グァム島、米軍占領 ・1944年6月～8月

○マリアナ基地からのB29空襲 ・1944年11月24日の東京空襲に始まり1945年8月15日まで

☆第1期:高高度精密爆撃 1944年11月24日～1945年3月9日

- ・米軍主任務(第20航空軍B29対日戦略)「日本の軍事的、工業的、経済的組織をできるだけ速やかに逐次破壊し、かつ日本人の戦争遂行能力と意思とが決定的に弱化させる程度に日本人の戦意を沮喪させる」

☆第2期:大都市焼夷弾空襲 1945年3月10日～6月15日

- ・カーチス・ルメイ司令官による「無差別じゅうたん焼夷弾爆撃」～夜間大編隊

※この間、米軍の硫黄島占領

- ・1945年2月16日から艦砲射撃。19日米軍上陸。3月2日3日の激戦で日本軍の組織的戦闘が困難に。16日日本軍の最後の総攻撃、22日まで戦闘状態。

※この間、沖縄戦

- ・1945年4月1日、米軍、沖縄本島上陸。組織的戦闘終結は6月23日。琉球政府～沖縄県は、この日を「沖縄慰霊の日」として制定している。

☆第3期:中小都市焼夷弾空襲 1945年6月17日～8月15日

○中小都市空襲一覧 いずれも1945(昭和20)年、未明から夜間にかけての焼夷弾による空襲計画による。「B-29 64都市を焼く」奥住喜重 揺籃社より

⑦7/09-10:仙台、堺、和歌山、岐阜

⑧7/12-13:宇都宮、一宮、敦賀、宇和島

⑫7/28-29:津、青森、一宮、宇治山田、大垣、宇和島

⑯8/14-15:熊谷、伊勢崎

○「南頬町第五部重要事項記録」 --- 一部抜粋 ---

七月九日

岐阜市を焼爆撃して大火災を生せしめ、我大垣市近郊にも同様行動して、農家に損害を生せしめたり、今回の焼夷弾は其発火と火の廻りの早きこと、従来のそれとは大に異なり、到底初期防火など思ひも寄らさることを教へられたり、其結果遂に避難を主とすることに当局の方針一変を見ることとなれり

七月十日

以上に於ける岐阜市の戦訓に鑑み、当局も従来の方針に訂正を加ふるの止むなきに至り、防空活動可能の者と雖も、速（や）かに退避して、其生命を護ることに重点を置かることになり、事前退避をなさしむることとなる

七月十六日

本日空襲警報に依り、防空要員を残留せしめず、家を空けて逃避するものに対しては、最少限三日間位の配給を停止することあるべく、又其住居は其権利なきものとして、之を取毀つか或は他の人に使用（空家と見做して）せしむることとなることあるべき旨を通達あり、一般へ周知

○防空法について wiki参考

※1937(昭和12)年4月5日公布、10月1日施行

- 空襲被害を軽減するために、「軍以外の者」が行う「灯火管制、消防、防毒、避難及救護並ニ此等二関シ必要ナル監視、通信及警報」の8項目を「防空」と定義。

※1941年改正で、「偽装、防火、防弾、応急復旧」の4項目が追加。退去の禁止（第8条ノ3）と、応急消火義務（第8条ノ5、1943年改正後は第8条ノ7）が規定。

- 内務大臣発の通牒で「空襲時ニ於ケル退去及事前避難ニ関スル件」は、「退去ハ一般ニ行ハシメザルコト」としたので、国民の退去が全面的に禁止された。
- 1943年10月の再改定で「分散疎開、転換、防疫、非常用物資ノ配給、其ノ他勅令ヲ以テ定ムル事項」の5項目が追加。
- また、生産疎開（第5条ノ7）、建物疎開（第5条ノ5、6）、人の疎開（第5条ノ9）など、疎開に関する条文が追加。
- さらに「退去の禁止」（第8条ノ3）は「退去の禁止または命令」と改定。

※疎開の内容が盛り込まれたが、応急消火義務（第8条ノ7）は継承。

- （各種焼夷弾に関する十分な知識・装備や消火設備もないまま、都市部の市民は太平洋戦争末期の無差別空襲においても消火活動を強いられた。）

○防空法では、逃げるな、消火せよ。だが、空襲の中で市民を逃がそうとした人もいた。

○戦争が終わって、思わず「ああ、うれしい」。日本が負けたのに、という以上にほっとした。

○夜、電灯をつけてもいい。安心して眠れる。

○生きて帰ることができた人は、家族に会って抱き合って喜んだ。